神奈川県
県立青少年センター

共感する場を創る

WORKSHOP REPORT 2019

令和元年度

舞台芸術活用青少年支援事業　報告書

はじめに

多様性を尊重することが求められる現代において、文化芸術が人にもたらす影響は計り知れないものがあると考えられます。神奈川県立青少年センター（以下「青少年センター」）において、昨年度よりスタートした本事業は、文化芸術の持つ力を強く実感させてくれるもので、当館の機能を相互連携させることで、青少年センター独自の支援プログラムの達成を目指すものです。

今年度も、演劇やダンスに限らず、舞台芸術全般の手法を使ったワークショップを、青少年センター内の各課が連携して、合計６度にわたり実施いたしました。

前年度に引き続き、ホール運営課とサポート課では、「寄宿生活塾 はじめ塾」、「子ども自立生活支援センターきらり」、「フリースクール鈴蘭学園」で、ワークショップを企画・実施いたしました。この事業を県内の同団体・施設で継続して実施することで、子ども達や団体・施設側の人々、様々な人々が舞台芸術の深さ、意義を実感し、共有することが出来たように思います。指導者育成課においても、昨年に引き続き「インプロ」を中心としたワークショップを行う中で、自分たちが自由に発想することで、他者を慮ることの必要性を深く実感していくきっかけが出来たのではないでしょうか。また、これらの活動により、子ども達の自己肯定感・自己効力感を育むことはもちろんのこと、アーティスト側にも、指導する体験を通して、自身を磨き、文化芸術をより多くの人に理解してもらうための手がかりを得ることが期待されます。

すべての人々が等しく文化芸術に触れることで、日々の生活が豊かになり、創造・表現活動を推し進めることで社会が成長することを願って止みません。この企画にご尽力いただきましたアーティスト、団体・施設の皆様方、参加した子ども達に感謝を申し上げるとともに、この報告書が様々な場面を展開する際に少しでも役立てれば嬉しく思います。

神奈川県国際文化観光局
舞台芸術担当部長兼
神奈川県立青少年センター参事
楫屋　一之

目次

01　はじめに

02　目次

03　事業概要

05　派遣アーティストプロフィール

【Report】

08　はじめ塾ワークショップ

14　きらりワークショップ

22　鈴蘭学園ワークショップ

28　青少年指導員セミナー

32　身体で感じるコミュニケーションワークショップ

36　子ども施設指導員セミナー

事業概要

（１）趣旨

不登校、引きこもりや、その他環境上の理由により社会生活への適応が困難になった子どもたち等、青少年の課題への対応策として「演劇」という表現方法に参加することで、自身の自己決定能力やコミュニケーション能力の向上を図る。

更には、参加者相互の信頼関係の醸成を通して、グループ内でお互いの個性を尊重しながら、実社会での生活や就学・就業等の諸課題に主体的に取り組む姿勢を生むきっかけ作りとする。

（２）対象団体

・神奈川県に所在し、県内を活動拠点とする当事者、家族又は支援者で構成されている団体
・営利を目的としない団体であり、政治・宗教活動が事業の内容に含まれない団体
・県立・私立問わず、就学・社会適応が困難になった子どもの在籍する学校

（３）事業内容

舞台芸術の表現者（演出家・ダンサー等舞台表現を中心としたアーティスト）を各施設・学校等に派遣し、舞台芸術の手法を使ったワークショップを実施する。

プログラムの実施日数・時間・実施内容等は派遣先の施設側と打ち合わせを行い、ニーズを顕在化させた上で決定していく。

（４）支援措置

ア　本事業において負担する経費

派遣アーティストにかかる下見・プログラム実施にかかる回数分までの経費（謝金、交通費等）は本事業予算にて負担する。

また、アシスタントについての経費も同様とする。

会場使用料、機材使用料、消耗品等も本事業予算にて負担する。

イ　参加施設が負担する経費

特になし。

ウ　その他

派遣アーティストの指定はできないが、ニーズに沿ったプログラムを実施できるアーティストを選定し、派遣する。

（５）プログラムについて

派遣アーティストが県内の施設でワークショップを行うことで、それぞれの子どもたちが抱える課題について取り組み・改善するための一助とする。

（例）演劇の手法を使った施設・学校でのアウトリーチ、ダンス等の身体表現を使ったアウトリーチ、各施設職員を対象としたインリーチ等

多くの青少年、青少年に関わる人たちが施設独自の様々なプログラムを自由に企画することが可能となっている。

（６）事業の流れ

事業参画団体及び施設との打合せ→　アーティスト派遣　→事業実施　→　報告書作成

派遣アーティストプロフィール

© 平岩亨

多田 淳之介（演出家）

東京デスロック主宰。現代を生きる人々の当事者性をテーマに古典から現代戯曲、ダンス、パフォーマンス作品まで幅広く手掛けが、演劇を専門としない人や子どもとの創作、ワークショップ、韓国、東南アジアとのコラボレーションなど、演劇の協働力を軸にボーダレスに活動する。2010 年には国内最年少で公立劇場演劇部門の芸術監督に就任し 3 期 9 年間務める。2014 年韓国の第 50 回東亜演劇賞演出賞を外国人として初受賞。東京芸術祭 APAF（アジアパフォーミングアーツファーム）ディレクター。四国学院大学、女子美術大学非常勤講師。

北尾 亘（振付家、ダンサー、俳優）

1987 年兵庫県生まれ神奈川県育ち。幼少より舞台芸術に携わり、クラシックバレエからストリートダンスまで多様なジャンルを経験。2009 年ダンスカンパニー [Baobab] を旗揚げ、全作品の振付・構成・演出を担う。単独公演のほか全国のフェスティバルに参加。若手アーティストのフェスティバル Baobab ディレクション「DANCE × Scrum!!!」「吉祥寺ダンスリライト」ではディレクションを担う。個人では多数の演劇作品、TVCM・映画・ドラマに振付。W S 講師やアウトリーチ活動にも積極的に取り組み、ダンスの発展に尽力する。ダンサー・俳優として近藤良平、多田淳之介、杉原邦生、中屋敷法仁、山本卓卓の作品に出演するなど、表現の場は多岐にわたる。横浜ダンスコレクション 2018 コンペティション I ベストダンサー賞、第 3 回エルスール財団新人賞、など受賞多数。急な坂スタジオサポートアーティスト。平成 30・31 年度地域創造公共ホール現代ダンス活性化事業登録アーティスト 尚美学園大学、桜美林大学非常勤講師。

©Kageaki Smith

目黒 陽介（ジャグラー、演出家）

1985 年生まれ。ながめくらしつ主宰。14 歳でジャグリングを始め、17 歳より大道芸やフェスティバル、舞台やライブハウス等に出演。2008 年より自身が中心となりジャグリング＆音楽集団・ながめくらしつを結成、ほぼ全公演の演出・構成を務める。また国内有数の現代サーカス演出家として（社）瀬戸内サーカスファクトリー製作の国際共同サーカス『100 年サーカス（2012）』、SETO ラ・ピスト『naimono（2015）』の演出を手がける。ミュージシャンとの即興パフォーマンスにも多数取り組み、ジャグリングと音楽を軸にしたさまざまな表現を模索している。2013 年 10 月よりエアリアルアーティスト・長谷川愛美とのユニット「うつしおみ」としても活動中。『空中キャバレー（まつもと市民芸術館）』、『十二夜（シアターコクーン）』など串田和美作品への出演も多数。

イーガル（作曲家、ピアニスト）

現代音楽作曲家・武藤健城は、イーガルの名で演奏活動も行っている。現代音楽作曲家としての経験を生かしたバラエティに富んだ作品と、情熱的な演奏に定評があり、イーガル独特の文学的な音楽世界に魅了されたファンは多く存在する。数多くのアーティストに楽曲を提供、共演。またソロでのライブも真面目に且つ面白く展開。その他にも伴奏者として活躍。またモデル、俳優としても活動している。主なユニット：あやちクローデル×イーガル、マカロニと世界、AYACHYGAL アヤチーガル、ながめくらしつ等。

特定非営利活動法人ドラマケーション普及センター

センター長：尾田量生。2005 年、文科省事業「コミュニケーション能力と表現力を高める演技・演劇による自己啓発プログラムの研究開発」の事業拠点として、ドラマケーション研究所を設立。2007 年ドラマケーション普及センターに改称し、2014 年にＮＰＯ設立。文科省や東京都教育委員会と連携して、演劇的手法を使ったコミュニケーション教育やキャリア教育を展開している。

松元 ドカン

俳優、ダンサー。パパイヤ鈴木とおやじダンサーズのメンバー。専門学校東京アナウンス学院講師。

池上 奈生美
（役者、インプロ・スキル・トレーナー、
株式会社インプロジャパン代表取締役社長）

1994 年、役者として活躍している中でインプロと出会い、1998 年以来毎年渡米し、成人教育や企業研修、劇団等の現場で、インプロ･スキル･トレーナーとしてトレーニングの指導を行っている。パフォーマーとしても「NeXT IMPRO THEATER」にレギュラー出演するなど精力的に活動し、海外でも数々の賞を受賞している。2001 年にはインプロの普及を目的にインプロジャパンを設立。ワークショップの監修・指導や、インプロシアターのプロデュース・出演、テレビ番組の監修など、インプロに関わる幅広い業務を行っている。著書に『インプロ・シンキング』（ダイヤモンド社）、『インプロであなたも「本番に強い人」になれる』（フォレスト出版）がある。

撮影・大久保七美

鈴木 聡之（インプロヴァイザー）

昭和 33 年 12 月東京生まれ。学生時代はキャンプリーダーとして子どもたちの野外活動に携わる。大学卒業後、千葉県立小学校教員養成所を経て、昭和 60 年から 21 年間、佐倉市立佐倉東小学校、佐倉市立王子台小学校、白井市立池の上小学校で小学校教員として勤務。現在、武蔵野学院大学（埼玉県狭山市）にて非常勤講師として「演劇表現論」「プレゼンテーション技術」担当している。平成 18 年より自身もワークショップを開き、現在までに全国 27 の都道府県で、インプロを活かしたワークショップや授業を展開し、2019 年 3 月末までに担当したワークショップ･授業は 1375 回を越える。また、自身もインプロヴァイザーとして、パフォーマンスライブ（即興芝居）のステージにも立ち続けている。平成 20 年からは関西でグループリーダーの大学生たちのインプロ研修を担当し続けており、ワンパク大学･友愛の丘･豊中野外活動協会等でもインプロ研修を実施。インプロパーク主宰。日本演劇教育連盟会員。即興型学習研究会顧問。一般財団法人ポジティブアースネイチャーズスクール（PENS）理事。インプロ in カフェコモンズ・ファシリテーター（2006 年より）。

Report 1

はじめ塾ワークショップ

1．実施概要

会場・日程

会場：小田原市民会館 小ホール
期日：令和元年 5 月 18 日（土）～ 5 月 19 日（日）

事業の背景及び趣旨

「演劇」の表現方法に触れることで、青少年自身の自己決定能力やコミュニケーション能力の向上を図る。更には参加者相互の信頼関係の醸成を通して、グループ内でお互いの個性を尊重しながら、実社会での生活や就学・就業等の諸課題に主体的に取り組む姿勢を生むきっかけ作りとする。

参加者数

合計　32 名
小学生　15 名
中学生　10 名
高校生　7 名

担当者の開催意図

はじめ塾でのワークショップが 3 年目を迎え、団体側にもこの事業の意義を理解してもらい、今後に繋げてもらいたい、そのような意図で事業の開催を行った。継続することで、より子どもたちの課題を解決するきっかけ作りができるためには、単年で終わらせるのではなく、数年かけて土壌を作っていくことが必要となるのではないだろうか。

ファシリテーター

アーティスト……多田淳之介（演出家、東京デスロック主宰）
アシスタント……舘そらみ（作家、演出家、ガレキの太鼓主宰）、橋本清（演出家、ブルーノプロデュース主宰）

2．プログラム内容

プログラム企画のポイント

はじめ塾は子どもたちが非常に能動的で、自らが創作を楽しみ、周囲とのコミュニケーションを楽しんでいける子どもたちも多い為、創作を中心としたプログラム構成となっており、その中で各々がどのように意見を発信し、受け止め、どのように参加者同士で演劇を楽しんでいくか、といったようなことが実感できるプログラムとした。

時系列プログラム内容

【5 月 18 日】
12:00　集合
12:30　打ち合わせ
13:30　ワークショップ開始、アイスブレーク
15:00　創作
16:00　ワークショップ終了
16:30　片付け
17:00　解散

【5 月 19 日】
9:00　集合
9:30　打ち合わせ
10:00　ワークショップ開始、アイスブレーク
11:00　創作 1

12:00　休憩
13:00　創作 1
13:30　創作 2
14:30　創作発表
15:00　ワークショップ終了
15:30　片付け
16:00　講師・塾生インタビュー
17:00　解散

プログラムの詳細

1 日目、2 日目ともに創作を中心として楽しめるようなプログラムになっていた。

1 日目のアイスブレイクの内容はダーウィンジャンケン、椅子取りゲーム等だったが、通常のルールとは違い、全員が慣れない人間と関わる、全員でどのように課題を解決していけば目標達成できるのか、といったディスカッションの要素も含まれたものだった。創作に関しては「場所」をテーマに、それぞれが人に限らず様々な人、モノになりきり、その場所で起こる物事を創作していった。

2 日目のアイスブレイクは、だるまさんがころんだ、を発展させ、ペットボトルなど鬼の手前に用意されたものに全員が協力しながら触れていき、元の場所まで持ち帰る、といったルールの元で行った。

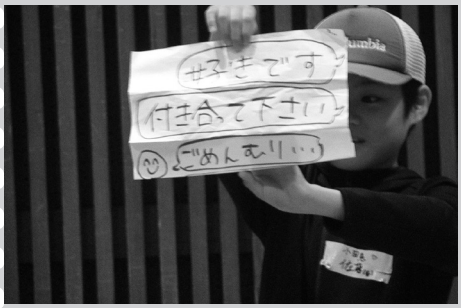
また、創作については、昨日に続き、「場所」をテーマとしたが、登場するのは人のみとし、その場所でどんなネガティブなことが起こり、何が起こると元気になるのか、といったことを各グループでディスカッションし、一つの劇を創作する過程を楽しんでいた。

時間よりも早い集合となったが、子どもたちが既に講師達と馴染む姿が印象的。

ダーウィンジャンケン。同じ種類の動物のみじゃんけん出来る、というルールの元、多くの人とコミュニケーションをとっていく。

1 日目の創作。子どもたちが創造することを非常に楽しんでいる。演劇は日常の延長線上にあることを自然と実感させてくれる。

2日目、アイスブレーク。だるまさんが転んだ、進化版。全員が物に触れながら行うことでチームワークを意識する。



二日目の創作。好きな場所等、様々な「場所」から想像力を働かせ、そこにいる人、起こる出来事を創っていく。

最初に創作したものをフィードバックし、落ち込んでるシーンから何かが起こって元気になる、ということだけ与えられ、各チームで小さな劇を創っていく。フィードバックされたことがすぐに反映されていく様子が非常におもしろい。

3．アーティストレポート

3年目となったはじめ塾の子供たちとのワークショップ、一昨年、昨年は2年連続で参加している子供たちが多かったが、今回は初めて参加する子供も多かったので昨年同様に演劇作りのステップを踏んでいくプログラムに変更した。

子供たちの様子は相変わらず変なグループ意識やヒエラルキーもなく全員がフラットな関係を作れているのが印象的。この中の数名は学校に行っていない子供なのだが誰がそうなのかは全くわからない。これだけ異年齢の子供が混ざりながらもコミュニケーションを取れている子供が学校では居場所がないのだとしたら、問題は子供ではなく学校の環境だろう。

今回のワークショップではシアターゲームでは協働することとトライアンドエラーの体験を重視した。演劇作りはトライアンドエラーで進んでいく。むしろエラーをしないと作品は出来上がっていかない。はじめ塾の子供たちに限らず、今の子供たちはエラーを恐れてトライしない傾向が強い、子供ではなくすでに大人になった若者たちにも顕著な傾向だと思う。失敗するくらいなら成功を目指さない、何もしないことがベストという環境で彼らは学ぶという経験が無いまま大人になっていく。ここ数年特に子供との演劇ワークショップではトライアンドエラーの体験をしてもらうことを意識している。簡単なゲームでも、勝負や結果はおまけであり、その過程に何が起こったのか、どんな発見があったのかが大事だ。たとえばジェスチャーで何かを表現する、それを受け取るというワークでも、正確に表現したものを受け取れたかどうかではなく、表現した本人も意図してなかった別のものに見えたりすることを楽しんだり、ポジティブに捉えるようにしている。ワークショップの現場でそういった振る舞いを我々

大人たちがすること、自分たちの失敗を一緒に楽しんでくれる大人の存在というのも子供たちにとっては大切なのだと考えている。もしかしたらプログラウムの内容そのものよりそういうことの方が印象に残っていくのかもしれない。

メインの演劇作りのワークでは、ある場所を設定して、その場所に来たくなる、場所の魅力を伝えるための劇を作ってもらった。昨年まではストーリー作りがメインだったが、今回は何かを伝えるために演劇を作る、ということに挑戦してもらった。人にどうやったらどう伝わるかを考えるということは、自分以外の他者について考えることで、人間とは何かについて考えることでもある。チームによってはストーリー作りに苦労しているチームもいくつかあり、ストーリーが考えにくかったら場所の設定変えても良いよと声がけしたが、どのチームも一度決めた設定は変えずに頑張りたいと言っていたのが印象的だった。例年通りどのチームも中高生が小学生をしっかりフォローする体制ができていたので発表も面白く、登場人物に変化が起こる＝ドラマが生まれることでその場所の魅力を伝える、というお題もクリアできていたと思う。3年連続で参加している子供たちも一定数いて、演劇作りに慣れてきているとも言えるが、と言っても一年に一度のことなのでそこまで初めての子供と差があるわけでは無いと思う。ただ何度か経験している子供の方が、どういうことが難しくてどういうことが楽しいのかをわかっているので、ストーリー作りで悩むことや、見ている人に伝わりやすいように工夫すること、全てのことに対して積極性があるように感じた。今年は昨年よりもっと面白いものを作りたい、楽しみたいというモチベーションはあるかもしれない。自分たちで考えたアイディアを演劇にして表現することを、失敗も含めてどう楽しむかということは何度か経験することでより身につくのだと思う。

子供たちと演劇、芸術を考えると、日本の公教育で行われている芸術教育というものは、技術を高め、評価を目的にしているため、本来の芸術教育とは真逆のことをしている。自己や他者、多様性を認め、解のない世界そのものを理解し、より豊かに生きていくためにあるのが芸術であり、それを教えるのが芸術教育だ。

日本でも幼児教育までは自由な表現というものが許されていると感じる。保育園や幼稚園に飾られている絵の自由さやダイナミックさが、小学校に入るとクラス全員が同じような絵を描くようになるのは何故だろうか。青少年をどう定義するかにもよるが、少なくとも技術習得では無い本来の芸術教育に触れていない世代、そして必要な世代だ。青少年が抱える問題、困難は、芸術不足が間違いなくその一因になっている。間違えても良い、評価もされない、自分自身そのものを受け入れてくれるのが芸術だ。そして演劇は自分の身体を使って体験するので、ダイレクトにその効果を感じられるものだと思う。本来ならば、しっかりと公教育で芸術を取り扱わなくてはいけないと思うが、達成を目指し評価を下すことが目的の日本の公教育のシステムに芸術はそぐわないのだろう。劇場や芸術文化施設がフォローしていくのが良いのだと思う。もともとあるシステムを変えることも日本の行政は苦手であるし、不足分を他で補うやりかたの方が近道なのかもしれない。

演劇や芸術で豊かな時間を過ごすこと、それは全ての人が持っている当然の権利のはずだが、なかなか日本ではそう言った機会が少ないので、アーティストとしては作品上演以外のこういったワークショップの場などでも、芸術の時間を過ごしてもらえると嬉しい。

4．担当者の振り返り
次回へ向けての改善点

企画・実施において苦労した点

子どもたちが自由に創造力を働かせ楽しめる環境を作ることに注力できていたように思う。また、はじめ塾の子どもたちは非常に活発な子が多く、思い切り動き回れるだけのスペースを確保すること、会場予算とのバランスを取る必要が出てきていた。

企画を実施した結果

はじめ塾での実施は三回目であることもあり、ファシリテーターの方々と子どもたちとの距離感もとても近い所からのスタートとなった。その為、子どもたちに対して何か配慮しなくてはいけないこと、ということが非常に少なかったように思う。これは、同施設にて回数を重ねたことで得られたものであり、年に１回というスパンでありながらも演劇に触れることを楽しみにしてくれるようになっていることが非常に大きな成果ではないだろうか。

次回、本事業を行う上での改善点

この事業を行っていく中で多くの他の団体・施設職員の方々が同じようなことを口にする。「はじめ塾だから出来るんだ」。もしそのように思われるのであれば、何があることで、何が要因となって、はじめ塾だから出来ているのかを少し考えていきたい。子どもたちの自由さや想像力を広げていくこと、他者への思慮深さを身に付けることがこの事業で成し得ることの一端であるならば、少しでも多くの施設の方にこのような取組みを見てもらうことが一つのきっかけ作りになるのではないだろうか。まずは、多くの団体・施設の職員の方々に目にしてもらう機会を増やすことを今後の課題として、この事業を様々な現場にどう繋いでいくかを意識しながら取り組んでいくことが必要に思う。

5．本事業における結果報告

参加者の気付き・感想

高校３年生／男性
今回のワークショップは、２日ありました。１日目はみんなで遊んだりして「これで劇できるのかな？」と思いました。今回のワークショップは、チームで劇を作るものでしたが、自分のチームは中々劇の内容が決まらず、時間が足りなくて、困りました。最後の最後には、皆で協力して、劇を最後まで作りあげることが出来て、とても楽しかったです。

中学３年生／女性
前回、劇を作ったときはお題があったけど、今回は、最初から自分達で、劇を作ったから難しかった。私の班では、皆に「海に行きたい」と思ってもらえるよう劇にしようと考えて作ったけど、考えているのと、実際にやってみるのとでは、全然違って、難しかったけど、皆が作った劇を見たりでき、楽しかった。２月には皆で作った劇を、お客さんに見せると言っていたので、楽しみです。

小学５年生／男性
１日目は全部楽しかったけど、特に「椅子取りゲーム」が楽しかったです。２日目も全部楽しかったです。特に楽しかったのは、皆で劇を作ったところです。去年も楽しかったです。次の２月も楽しみにしています。

小学４年生／女性
１番楽しかったのは、１番最後の劇を作るのです。最初からやるのは、難しいけど面白かったです。最初にやったゲームが楽しかったです。神様になるのが難しかったけどすぐ１番に神になれて嬉しかったです。

Report 2
きらりワークショップ

1．実施概要

会場・日程

会場：神奈川県立子ども自立生活支援センター
（きらり）
期日：令和元年９月17日（火）～令和２年１月21日（火）全５回

事業の背景及び趣旨

「ダンス」という身体表現に継続的に触れることで、子どもたちが達成感や自己肯定感を得るとともに、コミュニケーション能力の向上を図る。更には参加者相互の信頼関係の醸成を通して、グループ内でお互いの個性を尊重しながら、実社会での生活や就学等の諸課題に主体的に取り組む姿勢を生むきっかけ作りとする。

参加者数

合計61名
9月17日…14名、10月15日…18名、11月5日…18名、1月21日…11名

担当者の開催意図

昨年に引き続き、神奈川県立子ども自立生活支援センター（きらり）でのワークショップを行うことになった。施設側との打ち合わせの結果、今年度もダンスワークショップを実施することになり、きらり祭での発表をゴールとし、発表後に敢えて後日もう一度ワークショップを行うことで、子ども達にどのような変化がもたらされているのかを確認することも一つの目的とすることとした。子どもたちの変化を確認することは、施設側だけでなく、アーティスト側がワークショップの意義を再確認することにもつながり、今後、文化芸術を社会の各方面に広げ、多くの人が触れる機会を作っていく上での一つの足掛かりにできるのではないか、と考える。

ファシリテーター

アーティスト……北尾亘（振付家、ダンサー、俳優）
アシスタント……米田沙織、水越朋

2．プログラム内容

プログラム企画のポイント

自己の身体を使って表現する事の楽しさや自己肯定感を子どもたちに感じ取ってもらうプログラムとした。

また、昨年度実施時に、子どもたちが他者に自らのパフォーマンスを披露したことで、喜びを感じることができたという成果を踏まえ、きらり祭の場での発表を意識した構成とした。

さらに、施設の職員と調整をしながら、定例的に独自のダンス活動を継続していた情緒面での課題があるため支援が必要な第３課の児童と知的なハンディを持つ２課の児童それぞれが、アーティストに求めるレベルが異なることへの配慮を加えた。

時系列プログラム内容

【9 月 17 日】

14:30　集合

15:00　施設到着

15:30　ＷＳ準備

16:00　ＷＳ開始（ウォームアップ）

17:00　ＷＳ終了

17:30　アーティスト解散

【10 月 15 日】

14:00　集合

14:30　施設到着

15:00　第 3 課見学

15:30　打ち合わせ・準備

16:00　ＷＳ開始（ウォームアップ）

17:00　ＷＳ終了

17:30　アーティスト解散

【11 月 5 日】

15:00　きらり祭流れ確認

15:30　音響打ち合わせ

16:00　WS 開始 (ウォームアップ)

17:00　WS 終了

17:30　アーティスト解散

【11 月 9 日　きらり祭】

9:00　最寄り駅に集合し、会場へ向かう

10:00　会場入りし、打ち合わせ＆ WS 準備

11:00　WS とダンス発表開始

12:00　WS 終了、きらり祭の見学

13:00　きらり祭終了し、解散

施設の子どもたちとダンスワークショップ。まずは体を動かし、触り、自分の体を自覚していく。

きらり祭発表に向けてのワークショップとなり、全体での集中力も高く、自由に体を動かしている。

きらり祭でのダンスワークショップ開始前に講師によるデモンストレーションとしてダンスを披露してもらった。

きらり祭当日。ダンスワークショップを行う流れで観客も参加できるような体制とした。

当日に急遽参加したくなった子どもたちも受け入れ、観客と一体になって踊る様子がとても良い雰囲気のものであった。

【1月21日】

15:00　施設到着

15:30　WS準備

16:00　WS開始（ウォームアップ）

17:00　WS終了

17:30　アーティスト解散

プログラムの詳細

【1日目】

昨年と同様のワークを行い、子どもたちの反応も非常に和やかであった。各々ダンスを楽しむ人もおり、踊らなくてもその場の空間を楽しむ人もいて、自由に選択できる喜びがあるように感じた。

【2日目】

年齢が低めの子ども等が属する第2課を中心としたワークではなく、年齢層が高く、ダンス経験等もある子が属する第3課を中心としたワークにしてほしいとの要望があり、ダンスの難易度を大きく上げるという対応を行うことになった。結果として第3課の中で参加してくれた子達は非常に集中して取り組んでいる様子が見え、今までとは違うワークになっていたことが印象的であった。

【3日目】

きらり祭前のワークショップとなった。前回、内容の方向性が変更となってから2回目のワークショップである。次回のきらり祭に向けての内容も盛り込んだが、子どもたちはアーティストとの関係性も出来ており、集中力を持ってダンスワークに取り組む様子が見てとれた。

【4日目】

きらり祭当日。様々な催しや発表の中の一環としてダンスワークショップを行った。開始直後、アーティストによるデモンストレーションとしてのダンスを披露し、その後、ダンスワークショップへと移

行していった。ワークショップはダンスクラブの子どもたちを中心とし、当日観覧に来ている人たちも巻き込んで参加できるような形式とした。開始当初、まずは体をほぐすようなワークから始め、最終的には、ダンスの盆踊りのような形になり、客席を縫って輪を作ってその周りを踊りながら回っていく。昨年参加した子どもたちもおり、飛び入り参加する子どもたちも含め、全員が非常に楽しんでいるような印象を受けた。

【5日目】

きらり祭後の振り返りとして、ダンスワークショップを行った。

アーティストに抱き付いて、再会を喜ぶ様子が確認されるなど、子ども達との良好な関係が醸成されている様子が確認された。

ダンスワークショップに参加した子ども達は、今まで以上にダンスに集中が出来ており、ダンスの難易度を大きく上げた動きにも、的確に対応が出来る様になった事が、とても印象的であった。

昨年と今年の2年間のダンスワークショップで、参加した子ども達のダンススキルは、かなり向上しており「継続は力なり」である事を実感した。

ダンスワークショップに参加してくれた子ども達が、今後もダンスを続ける事で、更なる向上が期待できると考えている。

3．アーティストレポート

プログラムの事前準備・当初の狙い

昨年度に引き続き関わりを持たせていただく事になった“神奈川県立子ども自立生活支援センター（以後、「きらり」という。）ダンス部”。継続実施はアーティスト側にとっては非常に有意義な機会である。前回までの経験を実施プログラムに取り入れながら、また新たなアプローチを試みるなど可能になる。加えて、参加者や関係職員との関係性も引き継げるため連携がスムーズになる。そうすると実施内容とその効果に可能性の幅が生まれる。

昨年度からの変化としては、私たち以外にも外部講師を招いたダンス活動が加わった点であると伺った。（これはダンス部活動とは別の有志参加者による定例活動だそうだ。）

昨年度の成果も踏まえた上できらり職員の方々からは、その別活動との“差別化”との要望があった。ただ具体的に内容について触れるものではなく、別活動の内容紹介を受けたという程度に留まる。

加えて前年度までと変わらず、下記の内容については継続的に要望があった。

・ダンス体験を通して表現する事の楽しさや自己肯定感を与えて欲しい

・11月に実施する“きらり祭”でのダンス部の活動披露を見据えたプログラム内容にして欲しい（本番でもワークショップ形式で、参加者の方も楽しめるような空気感を演出）

前回の“きらり祭”では、生徒さん達の「披露する喜び」を強く感じた。その達成感も大切にしながら、より豊かな実施プログラムを立案出来るよう取り組みを始めた。

実際にプログラムを行っての結果 気づき・所感

きらりには3つの子ども課が存在するが、私が引き続き実施を行う対象は子ども第2課と子ども第3課の小学生～中学生が主である。実施の際のコンディションは日によって異なり参加するか否かも本人たちの自由であるため、プログラムを組み立てた上で柔軟に実施していくことが問われる。初年度は突然上がる奇声や激しく物音を立てるなど、障害児

童への実施経験が少ない自身にとっては驚きの連続であったため、今回は落ち着いてそれぞれのコンディションを受け入れ緩やかに溶け込むように出会うことを心掛けた。

一点予想外であったのは、継続して参加するダンス部生が少ないという状況についてである。これはきらりに入所している子どもたちの入れ替わりがあること、また、それにより時の経過とともに子どもたちの興味や心情が変化していくことが影響してとのことだそうだ。

実施前には各課の部屋や活動部屋にアシスタントと共に出向き、ダンス部活動への声がけをした後に実施へと向かった。

初回実施プログラムは以下。

・擬音や自然現象を用いたヘンテコ準備体操を形態模写（モノマネ）していく
「動きの作用を分かりやすく導きながら、普段とは違った体の扱い方を楽しむ。参加者の反応を見つめながら、感覚やイメージの捉え方を探っていく」
→これは自身ではベーシックな導入で前年度初回にも実施した内容であったが、今回はなかなか反応が出にくく少々焦る事もあった。予想以上に参加者の顔ぶれが昨年度と違い、また「こんなのやりたくない！」というような声が続出する状況となった。

・リズムに合わせて“ジャンプでハイタッチゲーム”
「音楽を活用し、リズムに合わせてカラダを動かす楽しさとコミニュケーション体験する。」
→全体の空気にまとまりが出にくい状況で、自身やアシスタントがアプローチするとハイタッチで返す程度であった。音楽への反応は感じられたので、途中からは「音楽に合わせてカラダを動かし空間をお散歩する」という内容にシフトチェンジした。

全体としてはきらり職員の方々がおっしゃる通り参加者の顔ぶれは大きく変化し、継続実施ながらも同じプログラムでも全く違う反応となった。昨年との共通点として、初回実施の際には「外部の人間」として生徒達と丁寧に出会うことがやはり重要だと感じた。それぞれの反応を受け止め関係性を結ぶことに重きを置き、予定していたプログラムを減らして１つ１つの内容に時間を掛けて実施した。

初回実施を経ての要望

今回の実施全体の中で一番大きなターニングポイントとなったのは、初回実施を経てのきらり職員からの追加要望である。内容については以下である。

・「子ども第２課の児童については別のダンス活動で充実を確保できているため、子ども第３課の児童に向けた“カッコイイ今風のダンス”を中心に実施して欲しい」との事。

要望をいただいた当初は困惑もあった。恐らくご所望であるのは「ストリートダンス」であるが、我々はそのジャンルだけにとらわれぬダンス表現活動に重きを置いているからである。また一度実施を行なった上での方向転換は、生徒との間に生まれ始めた関係性を振り出しに戻してしまう可能性も懸念された。

とはいえ、生徒さんのためのご要望という所で落とし所を作り、第２回は内容を組み替えて実施した。主に新規で実施した内容は以下。

・ウォーミングアップからリズム感の強い音楽を流し、ダンスレッスンのようにリズムに合わせたアイソレーション（身体の各部位を分解して動かすトレーニング）を取り入れた
→音楽への敏感な反応と重なり合い、生徒たちの注目や集中力は前回よりも向上した。

・ストリートダンスのステップや振付の一部を、ウォーミングアップの延長で繋げて共に踊る
→動きの内容によってはドロップアウトする様子も伺えたが、振付の展開を細分化し反応に合わせて緩急をつける事で、諦め掛けた生徒も結果的には参加する姿勢を見せた。

様々な懸念をあったものの、実施の中で得られた生徒たちの反応からこの方向性の方が興味の持続を感じられ、最終的な参加人数も増加する結果となった。

この結果を基にきらり祭本番での実施内容も定まる運びとなった。
昨年のメインプログラムであった『日常動作ダンス』に変わって、リズムに合わせてカラダをほぐしながら様々なストリートダンスの要素に触れる『リズムオリエンテーション』を主軸とする事になった。

実施プログラムを行っての結果 気づき・所感

第３回目の実施も本番想定はあまり強めぬようにしつつ、本番で触れる内容には穏やかに着手するというプログラムを経て、きらり祭本番へと臨んだ。今回も 30 分程度の実演で、講師デモンストレーションの後はワークショップ形式での披露であった。
本番当日の生徒達の様子は、昨年とは打って変わり楽しさや興奮の中にどこか“落ち着き”を感じた。昨年は親御さんに加えて初めて周辺の地域住民を施設内に招待する機会であったため、緊張感も感じられたように記憶している。その機会をキッカケとして、この一年間で施設には様々な方々が出入りする交流が生まれたという。その成果や慣れもあってか、みんなが一体となって楽しむような空気に包まれていた。
「イキイキとカラダを動かしながら心も解きほぐす」という目標のもとに、本番では下記プログラムを実施した。

[①講師デモンストレーション] ３名のソロダンス + 即興群舞
[②リズムオリエンテーション] 参加児童を呼び込み、観覧者も交えながら交流
[③洗面台盆踊り] 観覧者も含めその場で振付（参加児童は経験済み）、場内全体を回るように披露

講師デモンストレーション開始時はたまたま児童達の休憩時間と重なり場内にダンス部生徒がほとんど居ない状況ではあったが、ワークショップ実施の頃にはしっかりと戻り３回の実施での参加者の多くが共に踊ってくれる結果となった。「リズムオリエンテーション」は日頃ベーシックに実施するプログラムとはかなりの違いがあるため慣れない点もあったが、生徒たちはカラダの温度と一緒に高まっていくボルテージに触発されるように懸命に踊り、それぞれお気に入り（得意）なステップの際にはより一層表情も豊かに大きく踊っている姿が印象的だった。加えて祭りにご参加されたご父兄や地域の方々も思い思いに真似てみたり、興味津々で眺めてくださる空気も相まって、生徒たちはより一層「披露できる喜び」を感じているようであった。

次回、本プログラムへの展望

同じ施設に出向く事はアーティストにとってもゆとりが生まれる良い影響を感じられた。冷静に生徒たちに目を向けられる視野の広さや、経験のある事象に対しての反応の早さ、そして顔見知りの児童との再会と実施は周りの児童に良き影響を波及してくれる成果も得られた。
途中の方向転換が結果的には充実した実施に繋がった点も大きな起点である。当初は昨年度の展望でもあった「継続実施の価値を確かめる」という方

針であったが、結果的には新たなプログラムを実施する事で「今、生徒さん達に届けるべきダンスの可能性」を模索する機会となった。これは他のアウトリーチ事業と共通して「１つとして同じコンディションでの実施は無い」という学びと通ずる貴重な機会であった。

“きらり”の特性として、生徒たちの意思表現はものすごい早さで日々変化している。今年度はその事に対して順応するようにプログラムを組み替えたが、また実施が叶うのであれば「同じプログラムを実施する事の効能の探求」は、試みてみたい事として残った。

幸い昨年度のもう１つの展望である「“きらり祭”開催後のプログラム実施」は実現するので、この機会から次なる可能性を模索してみたい。

4. 担当者の振り返り 次回へ向けての改善点

企画・実施において苦労した点

事業継続をしていく上での記録撮影等が出来ることが望ましいが、事業内容の特徴からか、どうしてもそれを行えない事情も出てきてしまう中、どのように今後に繋げていくための試みや記録を残していくことができるかが、一つの課題になると感じた。事業参加者の特性上仕方のないことであるとともに、何より参加者がストレスなく参加でき、今後に繋げていくことがまずは一番の優先順位である。しかしながら意義あるものにするためにも事業継続できるような体制を形として残さなくてはいけない、そのジレンマが多少生じてしまった。今後もあくまで参加者中心であることに変わりはないが、それでもどのように他者に対して事業の意義を伝え、残していくかは今後の課題であると感じた。

企画を実施した結果

昨年にも同内容でのワークショップを実施済みであるため、今年のワークショップにおいては少し流れが見えやすかったように思う。また、アーティストの方々も前年と全く同じであった為、施設側との関係性も出来ており、全体的に非常にスムーズに行われた。途中施設側からの要望があり、対象とするクラスの変更とともに内容の修正が必要となったが､柔軟な対応により滞りなく進めることができた。継続して事業を行うことで、舞台芸術に馴染みが薄い子どもたちに今までとは違った視野を提供できる時間になったのではないかと思う。今後、少しずつでも参加する子どもたちが増えるようにしていくにはどうしたらよいか、ということを次の課題としたい。

次回、本事業を行う上での改善点

当然ながら子どもたちが強制されて行うものではないので、日々の参加人数にバラつきがあり、ムラもある。参加者を定着させて継続的に参加してもらうことで自己表現や体を動かすことの楽しさ、出来ないことが出来るようになった時の達成感を実感してもらう、というのが次の課題になってくるように思う。課題を抱えた子どもたちが様々なことを自身で取捨選択し、何を楽しみ、何を学び、何を得ていきたいのか、そんなことを考えていける小さなきっかけづくりをしていくことが、この事業の大きな意義であると感じる。次回、参加者を増やす試みとして、初回のダンスワークショップ時にデモなどが入ると惹かれやすいのでは、と感じた。施設側との今後の進め方を考えていきたい。

Report 3

鈴蘭学園ワークショップ

1．実施概要

会場・日程

会場：相模原市立青少年学習センター 大会議室
日程:令和元年 10 月 10 日（木）～ 10 月 24 日（木）

事業の背景及び趣旨

対人関係への不安や心の問題を抱える子どもたちが、舞台芸術の手法に触れていく中で、心の諸課題やコミュニケーションへの不安等の課題に対して向き合う姿勢を作っていく。今回のワークショップについては、ジャグリングと音楽を軸とした集団創作の振興と普及を行う、創作集団ながめくらしつの目黒陽介をファシリテーターに招き、フリースクールの子どもたちがジャグリングを通して、モノを介し人とコミュニケーションを取ることに慣れ、コミュニケーション能力を高めることを目的とする。またジャグリングなどの特殊なスキルに触れ、今までになかった達成感を得ることで自己効力感を養うことを目的とする。

参加者数

合計 10 名
小学生　2 名
中学生　4 名
一般　4 名

担当者の開催意図

フリースクールの子どもたちの中には自己表現が苦手な子どももおり、ダンスや演劇といった表現方法については特に難色を示す中で、少しでも舞台芸術を身近に感じてもらい、コミュニケーションを取るための 1 つの方法に抵抗なく触れていけるようなプログラムを考えることが一つの課題となった。ジャグリングの中でも舞台芸術まで昇華させた作品を提供している、ながめくらしつであれば子どもたちのニーズをくみ取りつつ、コミュニケーション能力を高める一助を担えるのではないか、との話し合いの中でアーティストに依頼する運びとなった。モノとのコミュニケーションを通して人ともコミュニケーションを図っていく、というプログラムが非常に親しみやすいものになるという予感を持つ中でのスタートとなった。

ファシリテーター

アーティスト……目黒陽介（ジャグラー、演出家）
アシスタント……イーガル（作曲家、ピアニスト）

2．プログラム内容

プログラム企画のポイント

ジャグリングを通して物事が上達することでの自己成長の喜びを実感し、自己効力感を高めるとともに、ジャグリングのペアワークなどを行うことで、創造性を高め、相互の理解を得ることを一つの目標とする。また、今後の社会生活を営む上での文化的土壌を育み、他者への想像力を思いめぐらせる一助となることが望ましい。

時系列プログラム内容

【10 月 10 日】

12:00　会場設営

12:30　アーティスト会場入り＆打ち合わせ

13:00　子どもたち会場入り

13:30　WS 開始
（自己紹介＆パフォーマンス披露）

14:00　玉に慣れていく作業

14:30　玉を投げ、様々な受取り方を行う

15:00　ワークショップ終了

15:30　子どもたち解散

16:00　アーティスト解散

【10 月 17 日】

12:00　会場設営

13:00　アーティスト会場入り
＆子どもたち会場入り

13:30　前回のおさらい

14:00　玉の数を増やしていく

14:30　玉を他者と共有しあう

15:00　ワークショップ終了

15:30　子どもたち解散

16:00　アーティスト解散

【10 月 24 日】

12:00　会場設営

12:30　アーティスト会場入り＆打ち合わせ

13:00　子どもたち会場入り

13:30　前回のおさらい

14:00　動きをつくってみる

15:00　ワークショップ終了

15:30　子どもたち解散

16:00　アーティストのインタビュー
＆終了後解散

まずは玉を触り、体の色々な部分に置いていくことから始めた。普段触り慣れていないモノとコミュニケーションを取っていく。

ファシリテーターの目黒さんがジャグリングのパフォーマンスを披露。見ている子どもたちの目がとても興味深そうなものに変わっていく。

個人個人でジャグリングの練習、2 つ、3 つと増やしていくうちに集中力が増していく。少しの時間でもジャグリングは集中力と神経を使うため、とても疲れる。

音楽に合わせてジャグリングを行う。ジャグリングに合わせて玉を動かしていく。ダンスのような身体表現のような不思議な空間になっていく。

休憩中でも子どもたちは休む様子もなく、楽しそうに動き回っていた。講師とのコミュニケーションをとりつつ様々なジャグリング以外の話題でも盛り上がっていた。

プログラムの詳細

【1日目】玉に触ることに慣れ、自分の体の様々な部分に乗せたりすることで自分の体のバランスを知る。少しずつ、体と玉が一対であることを実感していく。
【2日目】徐々にジャグリングの中でも基本となる2～3個の玉を回せるようにする。自分達が今までやってこなかったこと、意外なことが楽しいと感じてもらえるような発見を自身の内に見つけていく。
【3日目】音楽に合わせてジャグリングを行っていく。その中に、これまでの動きや二人一組での動きなどを組み入れていくことで、ジャグリングが舞台表現の一端へと変わっていく。参加者は自分達も気づかない間に舞台表現へと足を踏み入れることが出来た。

3．アーティストレポート

プログラムの事前準備・当初の狙い

【目黒陽介】

今回は3週連続、計3回のワークショップということで、普段は足早に進めてしまいがちな「3つのボールによるジャグリング」を時間をかけて丁寧に、ボールを投げ続けられる仕組みを理解してもらおうと思っていました。

また、1人で投げるだけでなく、相手の動きを理解し、協力して行うペアでのジャグリングにも挑戦できれば…というワークも考えていました。

事前に鈴蘭学園、青少年センターの方との打ち合わせで、以前実施されたワークショップの事や、子どもたちの事、一緒に遊んでいるような感じでやったらどうか？というお話を聞いてからは「楽しみながらも“どうすれば上手くいくのか”を参加者が自分で考え、実践できるようなってもらえれば」とい

う思いもありました。

とはいえ、ジャグリングの習得には個人差があり、集中力が続くのかどうか不安もあったので１回目はボールのみで行い、様子を見て２回目以降は他の道具にも触れてみる時間を作るか、３回ともボールのみでしっかりやるかは状況によって変化させていけるように進めていきました。

【イーガル】

実施前には、子供たちがどの程度こちらのプログラムに呼応するか、ということが分からなかったので、３回の実施に対して理想とするゴールを定め、それに対してセカンドゴール、サードゴールを用意しました。

音楽としては、これはプロに接するときも同じなのですが、私は生演奏でパフォーマンスをすることが自己表現の発展に繋がると考えている為、まず生演奏に触れるということだけでひとつの意味を持つと考えております。そのため、事前準備はジャグリング主体で、教えるルーティンに合わせて拍数を数え易い音楽を用意しました。

実際にプログラムを行っての結果 気づき・所感

【目黒陽介】

◎１回目

公募するタイプのワークショップと違い、参加者には未知のものに触れる不安は大きいのではないかという感覚はあったのかも知れません。最初は自分たちと参加者の距離も物理的にも心の距離も遠かったように感じます。

それでも、まずはボールに慣れてもらおうと１個から、身体のいろんなところに乗せて動いてみる事。そして一番単純に”投げて取る”ということを、ピアノの生演奏に合わせてタイミングやリズムを身体で感じながら繰り返す事。その２つのワークを通してだんだんとボールの数を増やしたり、複雑な動きになっていくにつれて、子どもたちの集中力も上がってきたように思います。こうして初日は３つのジャグリングのやり方までとなりました。ジャグリングはやり方を理解してから、実際にできるようになるまで時間がかかるものなので、この段階ではまだできなくても良いというつもりで進めていました。

終わってみて、子どもたちの雰囲気や自分たちとの距離感の感じで今回のワークショップでは最後までボールのみでじっくりやろうという方向に決めました。

◎２回目

２回目は１回目のおさらいとペアでの簡単なやり取りを目標に。

参加者が少し入れ替わっていたり、子どもたちとの距離が、一週間の間にリセットさせているのではないかという不安が少しありましたが、初回に比べて子どもたちも慣れてきたような気がするので割とスムーズに進んでいったのではないかと。

前半は少し長めに３つまでのおさらい・練習時間をとり、後半はペアでのジャグリングに挑戦してもらいました。

１人でやる場合と大きく違うのは頭と身体を使う割合です。技自体の難易度は１人で３つのほうが高いのですが、２人でやる場合は少し工程が複雑になり、相手にタイミングを合わせて行う必要があるため、身体的な難しさよりしっかりと動きの構造を理解することが大事になります。最初は少し混乱しつつも、上手くできるようになったと思います。

２回目が終わり、当初の目標はおおよそ達成できたところで、思わぬリクエストがありました。ピアノで自分たちの好きな曲を弾いてほしいというリクエストです。何曲か受けて次回、演奏するということになりました。

◎３回目

参加者は１回目にいて２回目にいなかった子や、２回目から引き続き参加の子、全日参加の子等、ばらつきがありましたが、前半は２回目と変わらず、これまでのおさらいから始めました。（この時点で、３つでのジャグリングは何名か続いてできるようになっていました。）

後半はリクエストのあった曲の中から１曲を選んで、１コーラス分の振付をやってみるというものに挑戦してもらいました。今まで覚えた動きや、新しい動きも入れつつ。最後はペアでのジャグリングまで全員上手く１コーラス分の振付ができたと思います。これは当初の想定よりも大分進んだことで、もし曲のリクエストがなければ、やっていなかったでしょう。

【イーガル】

当初懸念していた子供たちとのコミュニケーションは難が無く、プログラム自体も私たちの設定した理想のゴールに届いたのではないかと考えております。また、最終的にはかなり長いジャグリングのルーティンを覚え、音楽に合わせてパフォーマンスをする、という当初の予定を越えた結果を残せたことは成果かと捉えております。回数を重ねる毎に子供たちたちとの距離も縮まりましたが、子供たちそれぞれの距離感をこちらが壊さないように心がけました。

実施の中での私自身一番の発見は、子供たちからリクエストをしてもらい彼らの好きな曲を私が弾く、という先生からの提案でした。今までのワークショップでは私のオリジナル曲や即興演奏での実施を主にしておりましたが、子供たちが自身で選んだ曲／知っている曲を使うということでジャグリングをするということがより身近なものになったのではないかと思います。

今後のワークショップでも継続してこの方法を試していきたいと考えております。

次回、本プログラムへの展望

【目黒陽介】

連続してワークショップを行うことにより、無理のないスピードで、じっくり丁寧にジャグリングを習得していく、というのはこれまであまりなかったことでした。継続的な実施で、高くなりがちなジャグリングへのハードルが少し低くなったことは大変意義のあることに感じました。

また生演奏に合わせて動くことでリズムを感じながら、すんなりジャグリングが身体に入ってくることを改めて感じ、今後も継続していきたいと思います。

少し難しいかもしれませんが、人前で発表するというのも挑戦できれば良いのではないかと思いました。

【イーガル】

今後も変わらず、生演奏の魅力を子供たちに伝えていけたらと考えております。目標としましては、子供たちが自分たちの意思で音楽を作り出すきっかけを作ること、そして音楽を楽しむことを知って貰うことです。今回のプログラムを通して得た、子供たちのリクエスト曲を弾く、ということは音楽を身近なものにする意味において効果的であると感じたので、他プログラムでも継続して実施していきたいです。

４．担当者の振り返り 次回へ向けての改善点

企画・実施において苦労した点

子どもたちにどのようなニーズがあり、そこに対して舞台芸術で解決できる問題は何なのか、どの種

類の舞台芸術がそもそものニーズに応えられるものなのかを把握することが大きな課題となった。

演劇、ダンスといった文化芸術を通しての自己表現は、触れる機会の少ない人にはどうしてもハードルが高く感じられ、大きな抵抗感を示されることが課題となる。特にフリースクールに通う子どもたちは非常にセンシティブな印象を受けたため、その高いハードルを子供たちが抵抗なく受け入れられるような工夫が望まれる。舞台芸術を通してのコミュニケーションの楽しさに気付いてもらえればというこちら側の思いとは裏腹に、そもそも舞台芸術に触れることすら非常に抵抗感を持たれる中、自然とそこに入りこめるようなプログラムの幅を用意することの必要性を痛感した。

企画を実施した結果

舞台芸術に楽しんで触れられるようになるにはどうしたらいいのかを考えるきっかけになった。

舞台芸術に触れることに慣れていない子どもは触れることも見ることも一種の抵抗を感じることがあり、それを払拭していくことが必要になるのだが、いずれにしても実際に触れてもらうしかない。その大事な導入部をスムーズに行う意味でも、まずは子どもたちと日ごろ接している団体・施設職員の方々が興味を持ってもらえるような取組結果の提示と、いま舞台芸術に触れることで子どもたちが将来にわたって得られるメリットを単純に提示し、理解を得られた上で進めることが必須であると感じた。

次回、本事業を行う上での改善点

事業実施団体・施設において、何が課題となり、どのようなことに対しての改善を行っていきたいか、子どもたちにどのような影響を与えてあげたいかを双方が言語化し、意思疎通を図っていくことが重要である。

そのためには、事業実施側は団体・施設側に対して、明確かつ詳細にヒアリングを行っていくことがまずは第一である。その中で、企画側としてはこちらで出来ることを提示することが先行するのではなく、あくまで子どもたちのニーズを満たすことや、団体・施設側の課題解決の糸口としてもらうことが大前提であると捉え、中期的な目標を常に団体・施設、アーティスト、企画側の３者が共有しながら取り組んでいけるようにしたい。

Report 4

青少年指導員セミナー

1．実施概要

会場・日程

会場：湘南地域県政総合センター
日程：令和元年 6 月 15 日（土）

事業の背景及び趣旨

本事業は、主に新任や比較的経験年数の少ない青少年指導員を対象に、青少年指導員の活動について理解を深め、地域での実践に役立つ知識やスキルを身につけるために、毎年開催している研修事業である。県内を 4 地域に分けて開催し、管下の市町村から青少年指導員が数名ずつ参加し、他市町村の指導員との交流もねらいとしている。当センター指導者育成課が企画をし、地域の県政総合センターおよび青少年指導員連絡協議会と共催で実施している。

参加者数

成人の指導者　　49 名

担当者の開催意図

昨年度、指導者養成事業に演劇的な要素をとりいれた新規事業を実施するにあたり、参加者側のニーズや活動状況を考慮して、今までの研修事業との継続性を保つことを前提に企画にあたった。そうした中、「遊び」のもつ柔軟性や創造性を活用しながら表現力やコミュニケーション能力の向上をはかるために開発された、ドラマケーションというプログラムをとりいれた。体験会やファシリテーション養成講座の内容を見学し、そこで実施されているアクティビティが、青少年指導員が現場で活用することのできるものであり、なおかつそのアクティビティのとらえ方やファシリテーションの方法などに、指導者にとっての新たな学びの要素があり、参加者にも好評だったことから、今年度も別の地区の研修に取り入れることにした。

ファシリテーター

アーティスト…ドラマケーション普及センター
松元どかん（俳優、ダンサー）
アシスタント…増田敦（劇作家、演出家）

2．プログラム内容

プログラム企画のポイント

まずは、アクティビティを体験して、その中で自分や集団がどのように変容していくのかを観察したり、ふりかえりの中でそれをシェアし合ったりしながら、指導のポイントやファシリテーションのコツなどについて、短いレクチャーを入れこんでもらう。

時系列プログラム内容

13:30	開会式
13:40	ミニレクチャー 「コミュニケーションについて」
14:00	アクティビティ体験 （途中休憩をはさんで）
16:10	まとめ・質疑応答
16:20	閉会式
16:30	ふりかえり用紙記入・解散

プログラムの詳細

・ミニレクチャー「コミュニケーションについて」
　特にコミュニケーションの中での身体感覚の役割について

・アクティビティ体験
　あとだしじゃんけん、ハイタッチ送り（ひじタッチ、肩タッチ）、なんでもバスケット（二人組バージョン）、仲間探しゲーム、椅子とらせないゲーム
・まとめ

3．アーティストレポート

プログラムの事前準備・当初の狙い

　参加者同士の関係性を構築しながら、ファシリテーターと参加者との関係性も構築することをねらい、ファシリテーターとして体験から学びえた事柄を、アクティビティ進行中に生じるさまざまな現象に照らし合わせて、その場で解説を交えながら進行し、体験を学びに結びつけることをねらう。それらファシリテータースキルを学ぶことは、日常の活動を活性化させる際にも有用であることを示す。

実際にプログラムを行っての結果 気づき・所感

　プログラム進行中の『今、ここで起こった出来事』に注目し、その場で解説をすることで、それら注意点や工夫のポイントが、参加者の印象に残りやすかったように感じました。また、その取り上げた事例も、参加者たちの行動や発言から生じたものが多かったことも、参加者にはより印象に残ることにつながったと思います。そこには講義形式とはまた違った、体験から得られる「深い学び」の様子がうかがえました。

次回、本プログラムへの展望

　今回の研修で得た『学びの種』を、参加者それぞ

あとだしじゃんけん

ハイタッチ送り

ひじタッチ送り

仲間さがし

なんでもバスケット

椅子とらせないゲーム

れが自身の組織に持ち帰り、自ら実践することで、その学びをより深く自らに落とし込んでいただけることを期待します。また、今回の研修に参加していない人たちに対して、参加者自らの言葉や行動でそれらを引き継いでもらえることを望みます。

『教えることは、二度学ぶこと』といいます。良いと思ったことは、ぜひまわりの人たちと共有して、自らの組織における学びの機会を作り、それを深めてください。その過程で生じた疑問や質問を、次回またあるようでしたら、この研修に持ち込んできてもらえることを期待します。

4．担当者の振り返り 次回へ向けての改善点

企画・実施において苦労した点

意図的に演劇的手法をとりいれて実施する指導者養成事業は、昨年度からはじめたものであり、この地区は本年度が最初の実施となるため、地区の担当者に事業の企画意図やねらいを説明し、ある程度の理解を得るのに時間を要した。

企画を実施した結果

はじめは演劇的手法という言葉にとまどい、どのような内容なのか不安を覚えながら参加した方も多かったと思うが、講師の巧みなトークやテンポのよい進行にどんどん引き込まれていって、リラックスしながらの参加となっていた。演劇的手法を、「安心して過ごすことのできる空間づくり」というように考えるようになった方も多かったようで、それはそれで一つの成果ではなかったかと思う。

次回、本事業を行う上での改善点

青少年指導員セミナーの参加者は、各市町村からさまざまな事情で選出されてくるため、ベテランの指導員もいれば、新任の指導員もいる。希望して参加する方もいれば、動員で参加する方もいる。講師はそうした事情を理解したうえでプログラムを組んでくれてはいるが、参加者に対して研修の趣旨やねらいについて事前にある程度お知らせできるような方策を考えてみたい。

5．本事業における結果報告

参加者の気付き・感想

青少年指導員
3時間自分の集中力が持つか心配でしたが、飽きることなく、楽しく身につく研修でした。

青少年指導員
ひとつのゲームごとにはさみこまれるワンポイントアドバイスがよかった。

青少年指導員
演劇的手法というのが不思議な感じがしていたが、研修を受けると納得した。

青少年指導員
とてもリラックスして参加することができた。やはり、トークがうまいのだと思う。

Report 5

身体で感じるコミュニケーションワークショップ

1．実施概要

会場・日程

会場：神奈川県立青少年センター
日程：令和元年８月１日（木）

事業の背景及び趣旨

「体験学習プログラムセミナー」では、地域で子どもや青少年とかかわる支援・指導者や教員を対象に、体験学習の手法を使ったさまざまなプログラムの指導法や展開法を紹介するために、毎年数本の研修を実施している。今年度は､アイスブレイキング、グループワークなどをテーマとした３講座計６回のセミナーを企画し、その中で昨年度同様に演劇的手法をとりいれた指導者育成事業として、インプロ体験を設定した。

参加者数

支援・指導者、教員、学生　34 名

担当者の開催意図

インプロワークショップについては、以前にも青少年指導員対象の研修事業に導入したことがあり、自己の役割認識、変化への対応力、身体感覚の意識化など、自己理解や他者とのかかわり方について考える要素がたくさんあって、コミュニケーション能力の向上に適した活動であると考えて、企画した。

昨年度は､演劇手法の活用というねらいのもとに、実際の活動で使うことのできるアクティビティを学ぶということも目的の一つと考えていたが、講師からの提案もあって、今回は子ども・若者とかかわる支援・指導者として、その「かかわり方」について考える時間とする、というねらいを主眼として企画した。

ファシリテーター

アーティスト…池上奈生美（役者、インプロ・スキル・トレーナー、株式会社インプロジャパン代表取締役社長）
アシスタント…峰松佳代、清水千絵（株式会社インプロジャパン）

2．プログラム内容

プログラム企画のポイント

体験を中心とし、インプロワークショップによって自分自身の中に何が生まれるかを実感してもらう。また、ショートレクチャーを通して、今後のコミュニケーションについてより深く考えるためのヒントを提供する。

時系列プログラム内容

9:00	会場準備
9:30	受付開始、講師来所
10:00	オリエンテーション、講師紹介、レクチャー
10:30	ウォーミングアップ、アイスブレイキング
11:00	YOU ゲーム、共通点探し、「発信と受信」
11:30	ナイフとフォーク、カタチづくり
12:00	昼食
13:00	リズム DE10
13:30	連想ゲーム
14:00	ONE WORD

14:30　YES AND
15:00　YES AND 身体表現編
15:30　ONE WORD 発展編
16:00　まとめとふりかえり
16:30　解散

プログラムの詳細

午前：パワーポイントを使ったインプロの紹介
講師およびアシスタントによるインプロ（即興演劇）の実演、ウォーミングアップ、アイスブレイキング（連想ゲーム、ミーティンググリーティングほか）、YOU ゲーム、共通点探し、カタチづくり、ナイフとフォーク、ミニレクチャー「Leader と Reader」

午後：ストレッチ、リズム DE10、連想ゲーム、ワンワード、YES AND、YES AND 身体表現編、ワンワード発展編、ふりかえり（グループで一人一言）
講師のまとめ
＊アクティビティの名前は、記録の都合上こちらで便宜的に付けたものです。

3．アーティストレポート

プログラムの事前準備・当初の狙い

インプロ（即興劇）の手法を体験し、日々の現場で子どもたちの変化を感じ取る、受け入れる、ともに想像するなど、現場に生かしていくヒントとして実施した。参加者は、みな教育現場の方々なので、すでに場作り、アイスブレイクなどは十分なスキルがあると思われたので、その上で、より深い関わり方、瞬時のコミュニケーション力の強化を、単なるスキルに留まらず、ご自身の変化のきっかけとなることを狙いとした。

講師によるインプロ実演

ミーティンググリーティング

ナイフとフォーク

YES AND

YES AND 身体表現編

ワンワード

実際にプログラムを行っての結果
気づき・所感

当日は電車の遅延や暑さなどの影響もあり、開始当初は多少集中しきれない様子があったが、グループに分かれ、ニックネームを呼び合うとすぐに全員打ち解けて、明るい雰囲気になった。昨年に比べ、「指導するためのスキルを学ぶ」というより「ご自身のスキルアップ」を目的とされた方や、演劇教育にご興味のある方が多く、どんどん積極的に取り組んでいらっしゃった。最初は頭での理解が先行されていた方々も、「まずやってみる」という姿勢で取り組みはじめ、「自分が発信に意識が強く、もっと受信することが大事」という気づきも多かった。また、みなさんとても協力的で、「何を提案しても受け入れてくれる安心感があり、いつも以上に挑戦し、自分自身の発見になった。」というお声も多かった。
最後はとても感動的なお話ができあがった。

次回、本プログラムへの展望

初めての方も多いので、インプロ（即興劇）の始まりの部分にはなってしまっているが、今後、経験者が増えてくるようであれば、もっと本格的な即興劇体験も挑戦していただきたい。そのことで、より表現力、想像力、積極性、共感力が引き出され、充実した時間になると思う。また、２日に分けたプログラムにできれば、基本と応用を学ぶこともできるかと思う。

４．担当者の振り返り
次回へ向けての改善点

企画・実施において苦労した点

このセミナーの参加者のかなりの部分を教員が占

め、現場に持ち帰ってすぐに使うことのできるアクティビティを学びたいという動機で参加する人が多い。一方企画意図としては、参加者自身のコミュニケーション能力の向上やそのための「気づき」を主眼とした内容になっていたので、そうした方のニーズとインプロワークショップで学ぶこととが、どのようにシンクロするか、不安な部分もあった。

企画を実施した結果

参加者の大部分が教員であったが、１日の展開がスムーズで、長さを感じさせない研修だった。アクティビティの体験と短いレクチャーがテンポよく組み合わされており、それぞれの時間も適切な長さだった。講師やアシスタントの動き、参加者への働きかけも無駄がなく、研修の展開事例としても大変参考になった。

参加者も、講師やアシスタントの立ち振る舞いに励まされ、前向きに研修に参加できた様子が、ふりかえりの中からも確認できた。

次回、本事業を行う上での改善点

このセミナーは、県立総合教育センターの所外研修の一つとして位置づけられており、初任研、５年研などの研修の中の選択講座として受講する教員が一定数いる。広報や募集は総合教育センターのサイトで行われており、そのため事業の趣旨や内容を十分に伝えられないという課題がある。総合教育センターの協力も得ながら、参加者の事前の理解を促すような方策を考えたい。

また、今回は行政職員等の参加もあったが、教員以外の参加も増やすため、広報に工夫を加えたい。

５．本事業における結果報告

参加者の気付き・感想

教員／男性
指示（提示）がわかりやすく、ハードルを感じずにできるような語りも、大変参考になりました。コミュニケーション（の力）の原点を知った気がします。

教員／男性
身体を使った取り組みを通して、言葉と動きの連動の大切さや、全体を見ながら臨機応変に「Ｌ」と「Ｒ」の立場を変えることの大切さを知った。

教員／女性
今まで自分の中でもう一歩ふみ出したいと思っていた部分にふみこんで取り組めたと思っています。１人ではできないことなので、みなさんとできてよかったです。

教員／男性
何をやらされるんだろう…と不安でしたが、少しずつ世界に引き込まれた感じで、インプロの良さ（他者を意識できること）を少し理解できました。

教員／女性
説明と活動があり、一つひとつ確認しながら進められていたので、”インプロ”についてよくわかりました。

教員／女性
実際に身体を動かすと、受け身ではなく、身体を使った活動が多かったため、とても充実した一日になりました。新しい発見がたくさんあり、今後の活動にいかしていきたいと思いました。

Report 6

子ども施設指導員セミナー

1．実施概要

会場・日程

会場：小田原合同庁舎
　　大和市渋谷学習センター
日程：令和元年 9 月 20 日（金）・10 月 29 日（火）

事業の背景及び趣旨

学童クラブ・児童館等の子ども施設は地域に数多くあり、特に近年、学童クラブや放課後児童クラブなどの学童保育の施設は急増している。しかし指導員に対する研修の機会などがあまり多くは設定されておらず、現場で活用することのできるあそびやアクティビティを学びたいというニーズが高いことから、今回の事業を企画した。できるだけ広域の対象者に機会を提供するために、県内 2 会場でほぼ同一の内容で実施した。

参加者数

合計	78 名
児童館職員	28 名
放課後児童クラブ職員	35 名
その他（行政職員等）	15 名
（第 1 回小田原会場）	24 名
（第 2 回大和会場）	54 名

担当者の開催意図

この事業では、日々の子どもとの関わりに生かせるスキルを身につけてもらいたいという意図でさまざまな企画をしてきた。子ども施設の指導員にとって、あそびやものづくりなどアクティビティのレパートリーを増やすだけでなく、子どもにとって安心できる居場所をつくるための温かな雰囲気づくりや人間関係を育てるスキルも必要である。今回は演劇の世界から講師を招き、「場づくり」をテーマにインプロワークショップを実施した。アクティビティをゲームの一つとして現場に持ち帰るだけでなく、「誰もが『ここに居ていい』と思える場」を作るために大切なことや心構えについて、アクティビティを通して体験的に学ぶ機会とした。

ファシリテーター

アーティスト…鈴木聡之
（インプロヴァイザー、インプロパーク主宰）
アシスタント…会原実希、戸草内淳基、櫻井美賛子
（インプロカンパニー Platform）

2．プログラム内容

プログラム企画のポイント

実際にアクティビティを体験して、指導者自身が楽しみながら自己表現できる場を作りつつ、場づくりで大切にしたいキーワードについて参加者へ伝えた。またアクティビティを現場で実施する際の注意点や声掛けのポイント等についても、講師の体験談を交えながら適宜レクチャーしてもらった。

時系列プログラム内容

【9 月 20 日】

9:30	受付開始
10:00	オリエンテーション
10:10	アクティビティ体験
12:50	諸連絡

13:00　解散

【10 月 29 日】
9:30　受付開始
10:00　オリエンテーション
10:10　アクティビティ体験
12:50　諸連絡
13:00　解散

プログラムの詳細

・アクティビティ体験「グーチョキパーアンケート」「妄想サークル」「ネームサークル」「ネームコール」「ゾンビゲーム」「タケノコニョッキ」「アジャジャオジャジャ」「ナイフとフォーク」「写真の人」「ワンタッチ彫刻」「一文字しりとり」「ワンワード昔話＋スライド」「アイアムゲーム」「数字 de 感情表現」
・アシスタントによる即興劇の実演
・リフレクションタイム

3．アーティストレポート

プログラムの事前準備・当初の狙い

「場づくりに生かす」という趣旨だったので、ねらいを「誰もがここに居ていいと思える場をつくる」ことに絞って、その「場づくり」のために、私が普段どのようなプログラムを組んでいるのか、インプロ体験を通じてどのようなメッセージを伝えようとしているのかを、インプロを楽しみながら体感できるような内容にしていった。インプロを初めて体験する方が多いと思われたので、初めての方でもチャレンジしやすいプログラム構成を心がけた。

グーチョキパーアンケート

ゾンビゲーム

アジャジャオジャジャ

ワンタッチ彫刻

ワンワード昔話＋スライド

数字 de 感情表現

実際にプログラムを行っての結果 気づき・所感

参加者の皆さんが、予想以上に積極的に即興表現にチャレンジしてくださったので、そのチャレンジを通して伝えたいことも、スムーズに伝えることができた。

「どんな表現も OK」のインプロで遊ぶことが「どんな子もそこにいていい」と思える「場」づくりに繋がることを体感していただけたのではないだろうか？子ども施設指導員の方々は、学校の教員よりも「子どもたちひとりひとりに丁寧に向き合う」意識が高いと感じた。そんな皆さんが日々「無理せず」「楽しく」子どもたちと過ごすために、ぜひインプロを活用していってほしいと思う。

次回、本プログラムへの展望

より多くの子ども施設指導員の方に、今回のプログラムを体験していただきたい。また今回の参加者の方々とは、その後の現場での「場づくり」の実践について語り合う時間をつくり、それをもとに、さらにインプロを活かした「場づくり」の方法を一緒に探っていきたい。

4．担当者の振り返り 次回へ向けての改善点

企画・実施において苦労した点

子ども施設の指導員が日頃関わる子どもは小学校低学年が多く、小学校低学年の集団に対して理解のある講師、尚且つ出来れば小学校低学年に対してインプロアクティビティを実施したことがある講師に

セミナーを依頼したいと考え、講師選定に苦労した。

企画を実施した結果

最初に講師より「いつでも椅子に座って休憩をしていい」「『やらない』ことも一つの表現」という説明があり、参加者はリラックスした雰囲気で楽しみながら受講していた。講師は元小学校教師という経歴を持ち、小学生を対象としたインプロワークショップの経験も豊富なため、実際の経験談を織り交ぜながらアクティビティを進行することで参加者も現場に戻ってアクティビティを行うイメージをしやすかったようだった。また、アクティビティ自体を現場で活用せずとも、「表現に正解や間違いはなく、表現は自由」「相手の表現を否定しないで受け入れて、活かしていく」といったインプロ的な考え方を体験から学んでもらうことができたので、現場の場づくりに活かしてもらえることと思う。

次回、本事業を行う上での改善点

今回チラシを見てインプロという言葉を初めて聞いたという参加者がほとんどで、「何をやるのか不安だった」「演劇をやるのかと思っていた」「研修と聞いていたのでもっと堅苦しいものだと思っていた」等、セミナー内容がよくわからないまま会場へ来た参加者も少なくなかった。インプロワークショップの内容について文章で説明することは難しいが、できるだけ参加者の不安感を減らし、期待感を持って参加できるよう、チラシの説明文を丁寧に作成したい。

5．本事業における結果報告

青少年指導員
3時間自分の集中力が持つか心配でしたが、飽きることなく、楽しく身につく研修でした。

児童館職員
職場で活かせるプログラムばかりでした。特に、今日の様子をきくなど導入を入れながらやってみようと思います。小学校の教師だった経験からのおはなしもためになり、先生のように頭の中を柔軟に…を心がけたいと思います。

放課後児童クラブ指導員
社交的な性格ではないので、演劇とパンフにあったのを見て不安になっていましたが、3時間があっという間に感じる程充実した研修でした。「そのままの状態を受け入れる」という事を、今後子どもと関わる時に活かしていきたいです。

放課後児童クラブ指導員
「インプロ」という言葉は初めてだったので期待というより「何だろう？」という興味から入りました。即興で色々実演したが、恥ずかしい気持ちから、次第に「なんでもそのまま受け入れてくれる心地よさ」を感じた。正解も不正解もない。それが心地よい。

共感する場を創る

令和元年度　舞台芸術活用青少年支援事業報告書
編集・発行　神奈川県立青少年センター

〒 220-0044　横浜市西区紅葉ケ丘 9 番地の 1
電話：045-263-4400（代表）

編集協力　特定非営利活動法人ＳＴスポット横浜

発行日　令和 2 年 3 月

神奈川県立青少年センター

神奈川県
県立青少年センター　横浜市西区紅葉ケ丘９番地の１　〒220-0044
電話 (045)263-4400（代表）